太宰府の木鶯

柳　智子

一　はじめに

平成二十一（二〇〇九）年、太宰府市文化ふれあい館で、市民遺産展を開催した。筆者はその際、木鶯を取り上げた展示を企画し、関連資料の収集や関係者への聞き取り調査を行った。木鶯は太宰府ではあまりにも身近で有名であるため、その歴史や系譜などはすでに研究されていると考えていた。しかし、調査のなかで、多くの新資料に出会うことができ、木鶯に関する情報を体系的に収集した研究があまりに少ないと感じた。

そこで本稿では木鶯に関する文献や絵画資料、聞き取り調査などの情報を、なるべく多く記述し、記録することを目的とした。

また、様々な資料収集の結果、江戸時代から現在まで、木鶯の形態の変遷が追えることが明らかになった。個々の資料と時代ごとの特徴から、どのようにして現在の木鶯の形態に至ったかについて考察する。

二　太宰府天満宮鶯替神事と鶯

現在、太宰府天満宮の鶯替神事は一月七日の午後七時、楼門前の広庭に多くの参詣者が集い、行われている。鶯替神事に参加する人々が必ず手にしている祭具が木鶯である。神事は暗闇のなかで行われ、参詣者たちは「替えましょ、替えましょ」と言い合いながら、次々に木鶯を替えあっていく。時を見て、群衆に紛れ込んだ神職は、当たりの番号や言葉が貼られた木鶯を、参詣者の手へと手渡している。進行を務める神職の合図によって、木鶯の交換は中断され、当たりの番号や言葉が発表となる。ここで幸運にも当たり木鶯を手にした人は、本殿にて金鶯が授与され、一年の幸運を得るとされている。金鶯は神事と福みくじで、毎年一二個が神社から授与される。

この神事の祭具である木鶯は、実在する鶯鳥[1]の姿を形造ったものである。「鶯」の名前の由来については、宝永六（一七〇九）年に貝原益軒が記した『大和本草』の中で、「雄をテリウソ（照鶯）と云紅し、雌をアマウソ（雨鶯）と云、アカカラス、其声嘯（うそぶく）如し。故に名つく」とされている。鶯の鳴き声は甲高くフィーフィーと、人が口笛を吹くような音で、口笛の古語である「うそぶき」が名前の由来になっている。太宰府では複数の伝承が伝えられ、「あるとき、祭事執行の殿内に、熊蜂が巣くっていて、それに信者がまいた豆が当たり、蜂が驚き怒って、奉仕の人々を刺したので大騒ぎになった。それからは蜂を食う鳥と信じられていた鶯を木で形作り、蜂除けとして手に持ち参加するようになった」[2]、「社僧の一人、祭典中熊蜂が飛び来て、頭部面部を刺し、之に依って終に其社僧が死去したが、熊蜂は鶯が好んで食する蟲であるから、之を退治するの意味にて行事を始めた」[3]な

どがある。太宰府天満宮や祭事に降りかかった災難を除ける鳥として、鷽は神事に欠かせない祭具のモデルになったものと考えられる。この他に鷽と神事との関わりは、「鷽」の字が「學」（学の旧字体）に似ていることや、鷽（ウソ）を替えあうことによって、一年の間に人が知らず知らずつく嘘（ウソ）を天神さまの誠に替えて頂こう、という意味があるからとされる。[4]

三　木鷽に関する資料紹介

まず、木鷽に関する資料を分野ごとに記述しておく。

文献・絵画資料　江戸時代の文献、絵画資料は木鷽そのものに焦点をあてたものは少なく、鷽替神事について記したものが多い。鷽替神事の文献初見は、貞享二（一六八五）年成立の貝原益軒が記した『太宰府天満宮故実』[5]であり、「…正月七日の夜はまづ酉時ばかりに、うそがへと云事あり。さて其次に法事をなして後儺あり。鬼とりと云。…」とある。最も古い木鷽の絵図と伝えられる「宇曾替之守之図」は『天満宮御一代記・絵本菅原実記』[6]に収められている。

天保四（一八三三）年、尾崎雅嘉が記した『百人一首一夕話』[7]には大石真虎が描いた木鷽の図がある。この絵図は『天満宮御一代記・絵本菅原実記』と酷似しており、「樫の如き木を以て造る」、「この鷽替は万治年中の物にして或家に秘して持ちたるを、画史の写すものなり。古雅真に見るべし。」と注釈が入る。鷽替神事についての記述は、前述した『太宰府天満宮故実』と同じ内容である。この他に『百人一首一夕話』には鷽替神事の様子を描いた絵図がある。その注釈には、「鷽替の御祭事は、毎年正月七日の夜酉の刻頃、参詣の老若男女、木にて作りたる鷽の鳥を調へ、互いに袖にかくし、うそかえんとののしりて合いて、双方より取り替る事なり。…」とある。同様の記述は天保十一年の山崎美成の『三養雑記』[8]にも見られ、「筑紫の太宰府にて、毎年正月五日の夜、酉の刻ごろより鷽替の神事あり、今はよにあまねく知ることなれども、むかしはさることありと知る人まれなり、貝原益軒の筑前続風土記、及び天満宮故実などに見えたれど、くわしくは記さず。太宰府略記に、参詣の老若うちつどい来て、木に作りたる鷽の鳥を調へ、相互に袖にかくし、うそ替へんと詢りて双方より取りかへることなりとあり。予かの地の鷽をふたりまでとりよせもてり。近ごろ文政二年、大阪の天満天神にて、宰府にならひて、この神事をはじめて執行せしとき、大阪にてはやり唄に、「こころづくしの神さんが、うそとまことに替えさんす、ほんにうそかへ、おおうれし」という小唄をうたひしに、ことの外もてはやせしよりきけり、さて江戸にても、その次の年より本庄亀井戸天満宮にても、毎年正月二十五日、鷽替あり。」と記されている。鷽替神事に参詣する人々は、それぞれが木で鷽を作り、着物の袖に鷽を隠して神事に参加する習俗が窺える。このような当時の神事の様子は、秋月藩の御用絵師で後に太宰府に居住した斎藤秋圃が描いた文化二（一八〇五）年推定の絵俳書『わすれくさ』[9]と、嘉永六（一八五三）年の『筑前太宰府鷽換追儺之図』[10]や、明治九（一八七六）年～十五年収蔵の『筑前歳時図記』[11]がある。仙厓和尚が詠んだ「世の中のうそとうそとのかへかへにかへてあたへん我は誠を」の和歌の挿絵に木鷽の姿[12]が描かれている。

木鷽の御利益については、文化九年に浜松歌国が記録した『摂陽奇観』[13]のなかで、「此うそがへの事は九州太宰府の天神に於て、例年正月に此事あり。則ちうそがへの神事となづく、是を受得て其年の吉兆

を招くことにぞありける。さればうそはまこととかはり、わざはひの幸ひと成り、願ふ事の叶ひ、思ふことのなる、待人の来り、悪き縁はよき縁とむすびかはる。すべてあしき事は此鶯どりのうそとなりて、よきことにかはる。爰を以てうそかへと云々、また雷除の霊場にて、是を所持する家にはけっして雷の落る事なし、則ち、菅神の託宣にして宰府に於て人のしる所なれば、よのつねのもてあそびものにはあらず。信ずべし尊むべし、とりわけ商ひ繁盛交易利潤を祈るものは、うちこぞって年毎に是を受る事也。…」と詳しく記している。「よのつねのもてあそびものにあらず」は、決して玩具のような扱いをするものではなく、「信ずべし尊むべし」と木鶯への信仰を述べている。現在も太宰府では、鶯替神事の後、木鶯を家々の神棚に上げて祀る信仰が残っている。年毎に新しい木鶯を祀り、前年の木鶯は神棚から下ろされる。そのため、古い木鶯が残存しにくく、宰府周辺や他地域で古い木鶯を探したがほとんど発見することができなかった。それは、年毎に嘘を誠に替える神事の祭具であることと、御利益あるお守りとして木鶯を祀ってきた人々の信仰とがあったものと思われる。

明治から大正時代、昭和初期にかけては、郷土玩具の収集や研究が盛んに行われるようになり、蒐集家たちが遺した写生記録や研究誌に木鶯が掲載されている。なかでも、大阪の郷土玩具蒐集家でおもちゃ絵師の川崎巨泉は、大正八（一九一九）年から昭和七（一九三二）年に画帖『巨泉玩具帖』[14・15]、昭和六年から昭和十七年に『玩具帖』[16～18]を描いた。彼の蒐集の中には、明治十七（一八八四）年に吉嗣拝山の『太宰府廿四詠』[19]に描かれた木鶯も含まれている。写生にはそれぞれ産地や玩具名、年月日、寸法や素材まで記されている。写生された太宰府の木鶯は一一点に及び、当時の木鶯が江戸時代のものとうって変わって様々な彩色や寸法のものがあることが分かる。寸法は二寸（六センチメートル）から六寸（一八センチメートル）まであり、神事の祭具だけではない郷土玩具や置物としての木鶯が作られたと考えられる。

大正十五年、大久保千濤著の『太宰府の光』[20]に、「…何れにしても此神社年中行事の内で尤も盛に人が集まり来る時である。此鶯替が終りを告けると次に追儺の式典に移るのである。」と書かれ、当時の賑わいのほどが窺える。

昭和三十三年に開催されたブリュッセル万国博覧会に、「きうそ」が出品されている。ブリュッセル万国博覧会はベルギーの首都で、戦後初めて開催された。日本は当時の通産省を中心に、日本貿易振興会（現在のJETRO）により、日本館を設置し展示を行っている。テーマは「日本人の手と機械」である。繊細な伝統工芸品や精巧な工業製品を展示し、伝統に根ざした工芸品部門の一部として「郷土玩具、紙製品その他」のグループがあった。出品された郷土玩具名、出品した市町村名、作者名の内訳[21]は次のとおりである。

こけし	湯沢市	小椋久太郎
	宮城県鳴子町	高橋武蔵
	蔵王町	佐藤文助
	白石市	新山左内
	山形市山寺	石山三四郎
起上り	金沢市	中島めんや
きうそ	福岡県太宰府町	高田保
きじ車	瀬高町	彌永泰正
ふぐ笛	下関市	平岡商店
張子の虎ほか2点	香川県	宮内ふさ

獅子頭　宮武嘉吉
うずら車　宮崎県佐土原町　菊地甚蔵
三春駒　福井県三春町　佐久間広治
赤べこ　若松市　五十嵐新一

「郷土玩具、紙製品その他」のグループは、銅賞を受賞している。

郷土玩具について書かれた文献には、昭和九年武井武雄著の『日本郷土玩具』[22]、昭和三十一年の八幡民芸会松尾信夫著『九州の信仰と傳説の郷土玩具』、昭和三十二年の梅林新市著『福岡県の郷土玩具』、昭和四十八年の堤忠二郎著『福岡の郷土玩具』[23]、昭和五十七年の古川誠一著『九州の郷土玩具』、昭和六十二年の奥村寛純著『浪花おもちゃ風土記』などがあり、木鶯の記述がある。すべての著者は郷土玩具蒐集家である。太宰府天満宮に関わる書籍では、西高辻信貞著『学問の神様　太宰府天満宮と天神信仰』や『とびうめ』[24]の中に鶯替神事や木鶯についての論考がある。

新出資料…張子鶯について　昭和九（一九三四）年、武井武雄著の『日本郷土玩具』の中では、張子鶯が写真で紹介されている。太宰府の火除鬼面というタイトルの文章中に、「…鬼面を模した賣玩亦火除の禁厭として喜ばれ、張子及土焼兩種がある。張子は二寸（六センチ）内外の小品で鶯と同様糸で笹竹に吊すもの、筆技簡潔である。…」と記されている。この他に大正八（一九一九）年から昭和七年に川崎巨泉が写生した『巨泉玩具帖』[25]の中に、火除と書かれた鬼面と張子鶯が紐で括られ、「火除開運鬼すべ金運増」と記された御札が描かれている。同じく川崎巨泉が写生した『玩具帖』[26]には昭和十一年の張子鶯が描かれている。鶯は頭部に糸が付き、「金紙イロイロノ形ハル、青金赤金ヌル」、背中部分には「竹、紅、スミ点々」の記述が添えられている。高さは一寸二分である。木以外の素材で作られた鶯は鶯笛や鶯鈴があるが、張子鶯が鬼すべの鬼面とともにお守りとして信仰されていたことが分かった。

古写真　大正十四（一九二五）年、一歳になったばかりの赤子と一緒に撮影された大きな木鶯の写真[27]がある。ガラス乾板で撮影された最古の木鶯写真である。『太宰府の光』の写真を撮っていた大久保勝氏が撮影した。この写真は当時の木鶯の形態が分かるだけでなく、祝いの品としての木鶯の使用例を知る上でも重要な一枚である。現在でも、太宰府では大きな木鶯を新築や結婚、誕生祝い、厄除けなどで贈答する習慣がある。幕末の嘉永六（一八五三）年の斎藤秋圃の『筑前太宰府鶯換追儺之図』には鶯替神事で使用するには明らかに大きな木鶯が描かれており、祝い物などで贈答する習慣は江戸時代まで遡るとも考えられる。

収集品　現存する木鶯は、福岡市在住の郷土玩具蒐集家秋吉元氏の収集品が質・量ともにもっとも充実している。秋吉元氏は木鶯だけでなく、数万点に及ぶ様々な郷土玩具を収集している。そのうち、木鶯は松尾信夫氏と堤忠二郎氏のコレクションを受け継いだものである。現在、コレクションの大半は九州国立博物館に寄贈され、全国の木鶯を含む資料群となっている。太宰府の木鶯は昭和九（一九三四）年から昭和五十年までのものを年代順に見ることができる。この他のコレクションは熊本県人吉市にある人吉クラフトパーク石野公園内の展示館（伝統文化工芸館）で展示されている。九州国立博物館所蔵の昭和九～三十四年までの太宰府の木鶯[28～30]は占部家製作、昭和三十～五十年までの木鶯[31・32]は高田家、岡藤家[33]製作のものと考えられる。

四　木鶯に関する聞き取り調査

戦前、戦後頃の鶯替神事の様子について　戦前、戦後頃の鶯替神事の様子については「子供の頃の鶯替は父から「危ないけん回廊のところから見ろ」と言われていた。あれに巻き込まれたら大変、と思うような激しい行事だった。鬼すべ、鶯替は喧嘩御免の行事だった。だから今のように「替えましょ、替えましょ」というかけ声を聞くとがっくりする。昔は照明もなく、真っ暗な中で鶯替をしていた。神事に参加している群衆の上に湯気が立ってるのが見えるほどの熱気だった。木鶯はそんな激しい行事のときだけにしか使わないものだから、昔は作りも粗いものが多かった気がする。昔はダイコンを柱状にして袖に入れて、参加してる人もいた。男は酒を一杯ひっかけて出てる人もいた。女が入ると男がのぼせあがって熱気を帯びるので、女は入ったらいかんと言われていた。地元の者は鬼すべに出るので、鶯替はよそ者が多かった。」（大正十三・一九二四年太宰府生まれ）

「木鶯は自分たちで作るのが原型。出来がまずかったって自分たちで作っていた。自分はダイコンで作って入りよった。ダイコンもカールになりよりますけん。それを持つところを新聞紙で包んでおいて。それは小学校二、三年頃の話（戦前の頃か）。この頃の方が危なくなくて気安く入れていた。戦後のそれこそ暴走族が参加しよる頃は危のうして入られんやった。」（昭和六・一九三一年太宰府生まれ）

など、当時の神事の激しさやおおらかさを知ることができる。

占部家について　木鶯製作と職人については聞き取り調査から最も古くから木鶯を作っていたとされる占部勇氏について、占部史子氏（長女）にお話を伺った。[34] 占部史子氏も木鶯の絵付けを手伝っている。

「父（占部勇氏）は、明治三十三（一九〇〇）年～昭和六十三（一九八八）年没で享年九十歳だった。実家は宰府三丁目で飴や落雁、羊羹などを作って売るお菓子屋（現在は廃業）を営んでいた。看板商品は五本に枝分かれした竹串の先に五色五味の飴玉がついた「五色飴」で、店は「飴屋」と呼ばれていた。実家では商売の傍ら、家族で木鶯を作っていた。

木鶯は、三条（現在の宰府五丁目）に家を構えてから、木鶯専業で年中作っていた。太宰府だけでなく、東京の亀戸天神や福岡の住吉神社などから注文があり、それぞれの形にあわせて作っていた。とても手マメ（手先が器用）で、木鶯の他に琴を作っていたこともある。天満宮神職の御田良清氏に木鶯の作り方を教えたり、天満宮に時々教えに行ったりしていた。同業者として、岡藤家と高田家があって、鶯替神事当日にはそれぞれ絵馬堂で木鶯を売っていた。昭和二十七年頃、高度成長期を迎え、太宰府にも多くの観光客が訪れるようになった。おかげで木鶯は作った端から飛ぶように売れた。岡藤家と高田家が販売していた木鶯は目が大きくて鋭い感じで、占部家のは丸くて小さな目で対照的だった。お客さんが「こっちのほうが目の丸くて可愛いね」とか、作った人（勇氏）を見て「目がよく似とんしゃあ」と言って、買ってくれていた。木鶯の頭に金箔を二重に貼っていた。金箔の二枚目は一枚目よりも広めのものを貼ったので、売り場で風に吹かれてキラキラ輝いて美しかった。神事に使う木鶯の他に「マメ鶯」という商品も売っていた。人気の商品ですぐに売り切れていた。本物の梅の枝を板の上に立てて、枝に高さ二～三センチメートルの小さな木鶯をつがいで並べて、セルロイドの型抜きした紅白の花を膠で張ったものだった。木の根元には木くずを青竹（緑色の顔料名）で着色して、草に見立てて置いていた。昭和五十年頃で、天満宮の神職が木鶯のことを全

部できるようになったことと、高齢になったことで木鶯作りはやめてしまった。

占部家製作の木鶯の特徴　頭部の切り込みは定まった形はなく、胴部の切り込みは三分割して切り込む「三枚胸（さんまいむね）[35]」を作る。胴部の切り目は「七分三（しちぶさん）」といい、持ち手部分が全体の七割になるようにした。羽の巻き上げはやや不揃いで、巻き上がった羽が下がらないように「トメ」[36]がある。頭部には金箔を貼り、目の周りや羽は赤と青竹で彩色し、胸を丸く赤塗りしている。占部家の木鶯の特徴は、小さな丸目と、三つ叉の鍬先に似る足の形である（木鶯の各部名称については図1を参照）。

木鶯の製作工程　原木は「ホウノキ」[37]と言っていたが、削ると真っ白な木肌だった（コシアブラと思われる）。宮ノ森（筑紫野市）の地権者から分けてもらっていた。木は皮むきしてから、家の外に立てかけて干していた。原木を寸法ごとに切断する時に、鋸で一緒に胴部の切り目を「七分三」で入れていた。次に手押しの薬切りで、頭部と胴部の切り込みの「三枚胸」を削っていた。この状態まで仕上がったものをたくさん用意してから、羽を巻き上げる工程「羽上げ（はねあげ）[38]」に入った。羽の巻き上げは作る木鶯の大きさによって、使う道具や製作技法が違っていた。大きめの木鶯は柱に打ち付けて先を尖らせた五寸釘に、木鶯の頭部分を刺して固定し、特注のナタのような少し湾曲した刃物で、手前から奥に押し当てるようにして羽を削りあげていた。ナタは両端に握り手があり、布を巻いて使っていたようである。木鶯は四〇～五〇センチメートルのものまで作っていた。小さめの木鶯は短いナタ鎌を使った専用の台を固定して、手に持った木を刃に押し当て手前に引く方法で削っていた。「マメ鶯」は、幅の広い鑿で羽を立てていた。この作業は集中力が必要で作業中に声をかけると怒られていた。羽を巻き上げた後は、羽が下がらないように「トメ」の小さな巻きを入れていた。ここまでの工程は父（占部勇氏）がしていた。巻き上がった羽を揃えたり、絵付けをするのは母（占部スエ氏）と私（史子氏）の二人でしていた。羽を揃えるのに、先の尖った竹串を使っていた。羽は作った時には、巻き上げっぱなしなので、外側から竹串でひとつひとつ巻きながら整えて仕上げていた。「マメ鶯」の時は羽を針で巻き、整えて仕上げた。絵付け用の色材は湯飲みに溶いて、仕切りのある手作りの箱に入れて作業していた。色材は赤と緑だった。赤は袋入りの時はオレンジ色で水に溶かすと鮮やかな赤になった。赤色顔料はドイツ製で、博多まで買いに行っていた。緑は「青竹」と言っ

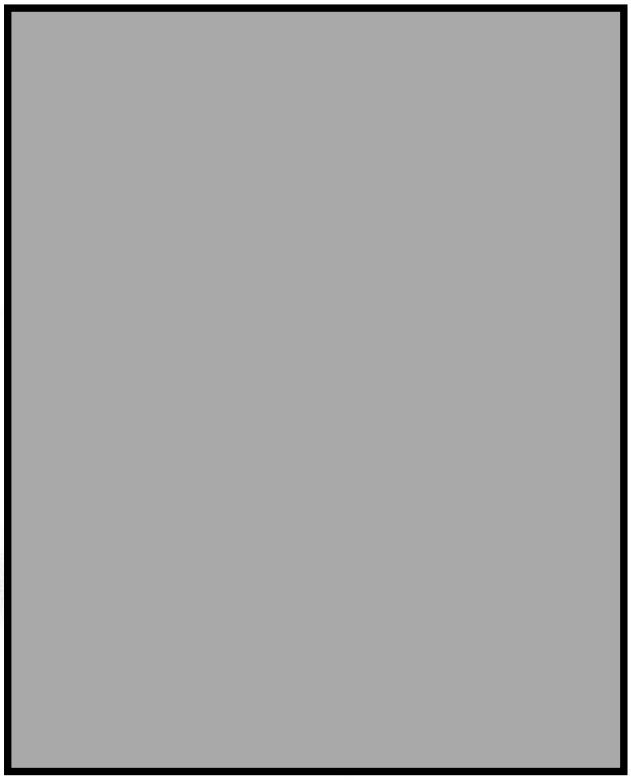

図1　占部勇氏製作の木鶯　　個人蔵

ていた。他の色材も試してみたが、着色したときに色が散るので駄目だった。目や足は墨で書き入れていた。私（史子氏）が岡藤家や高田家の木鴬のように、丸目ではなく、大きな逆三角目を書いて、出来上がった木鴬に混ぜておいたことがあった。しかし、父（勇氏）に見つかり、「こんな人まねみたいな目はいかん」と言って捨てられた。丸目にこだわりがあった。岡藤氏が木鴬製作の見学に来て、木鴬を鎌で作っていることに驚いていた。一九七〇年代頃、国際彫刻家の「ノグチ・イサム」が、父（勇氏）の木鴬製作の見学に来たことがあった。」

御田家について　次に占部勇氏から木鴬作りを習い、その後高田保氏に木鴬作りを手ほどきした太宰府天満宮神職御田良清氏については、御田慶子氏（妻）にお話を伺った。[39]

「夫（御田良清氏）は大正十一（一九二二）年十一月十一日～平成八（一九九六）年没。木鴬は中学生の頃から楽しみで作っていたと聞いている。手がとても器用な人だった。今の木鴬の形は「自分が作ったものだ」と話し、「羽立て」も今の形を考案したのは夫である。木鴬を彫る道具は家にあったが、作っている姿をみたことはない。ただ、木鴬を彫っている姿を写した写真があったのだけど。木鴬の作り方は高田保氏に教えて、彼の死後は妻（高田静子氏）が木鴬作りを引き継いで本格的に商売をされていた。そのうちに原木が手に入りにくくなったので、筑後あたりまで木を探しに行っていた。」御田良清氏は、占部勇氏から木鴬作りの手ほどきを受けている。しかし、占部氏のように鎌を使った木鴬作りではなく、突鑿を使用して製作をしている。突鑿を使用した理由については、戦時中は鑿などの金属製品が手に入らなかったが、戦後は入手できるようになったからとも言われている。

高田家について　御田良清氏から木鴬作りを習い、ブリュッセル万国博覧会へ出品した高田保氏については、高田京子氏（長男・高田幸男氏の妻）のお話を伺った。[40] 高田京子氏も羽上げや絵付けをされていた。

「義父（高田保氏）は昭和四十六（一九七一）年没。私（京子氏）が嫁いできた時には義父（保氏）は亡くなっており、製作工程を知ることはできなかった。しかし、長男で夫の高田幸男氏が平成六（一九九四）年まで木鴬の製作を続けていた。ブリュッセル万国博覧会のことは、聞いたことがある程度で詳しいことは分からない。ただ、阪急百貨店で物産展があったときに、木鴬のことについて書いた看板を大阪に送ったことがあり、たしかにブリュッセル万国博覧会のことが書いてあった。

義父（保氏）が木鴬を製作するようになったのは、太宰府天満宮禰宜（当時）御田良清氏の近所に在住していたことと戦後の就職難がある。御田氏の手ほどきで、木鴬の製作を始め、鴬替神事当日に絵馬堂で木鴬を売るようになった。

高田家の木鴬の特徴　頭部の切り込みが五角形で、胴部の切り込みは三枚胸である。胴部の切り目位置はほぼ半々の長さである。羽の巻き上げは段ごとに羽の巻きが揃い、巻き上がった羽が下がらないように「羽止め（はねどめ）」がある。頭部には金紙（初期のころは金箔）を貼り、目の周りや羽は赤と緑で彩色し、胸を丸く赤塗りしている。もっとも特徴的なのは、大きな逆三角目と、笹葉に似る脚の形である。これらの木鴬は、現在の鴬替神事や参道で見受けられる木鴬と同じ意匠で、今の木鴬の形態がほぼ出来上がっている（木鴬の各部名称については図2を参照のこと）。

ホウノキについて　原木は夏場に周辺の山並みを見て、原木を見つけていた。地権者を捜して、お話をして、伐らせてもらっていた。原木

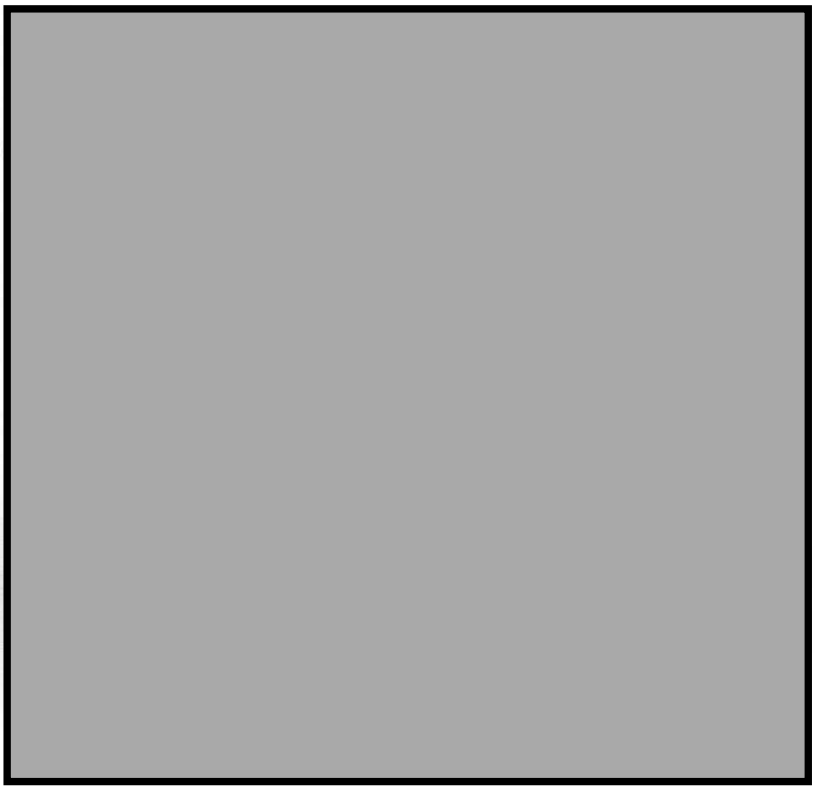

図2　高田保氏製作の木鶯　　個人蔵

の伐り出しは、稲刈りが終わった後にしていた。夏場に伐ると、木が割れてしまって使えない。節があまりなくまっすぐ伸びている木でも、伐り出すと割れてしまうものがある。節と節の間が真っ直ぐな木が割れにくいような気がする。伐採した木は、皮を剥いでから天日干しし、後で日陰干しをしていた。干している期間はだいたい一年未満だった。皮を剥ぐと、樹液が手や腕について、最初のころはまけて困っていたが、続けているとまけなくなった。木鶯に使う木は「ホウノキ」と呼ばれ、災い除けの木とされ、新築した家の四隅に置きたいといって、原木だけを買いに来る人がいた。木を手に入れるのが、とても大変でそのことが新聞に載ったことがあった。すると記事を読んだ人が、これを使ってくれといってトラックで大量に持ってきてくれたことがあった。見た目がコシアブラそっくりだったので、喜んだのだけど、木鶯を作ることができなかった。違う木だったようだ。コシアブラが刀の鞘に使われることがあって、その残りを使わないかと言われたけど、端切ればかりで使うことができなかった。木鶯をだんだんと作らなくなったのは原木を探すのが難しかったのが一番の理由である。木鶯に使う木はコシアブラの他に、柳や樫、ハゼの木も使えるという話を聞いた。

高田家の木鶯製作工程　昭和五十年くらいから梅園のうその餅用のマメ鶯を作ったり、参道のお店にも卸していた。その他に博多にあった県の物産館と、あとは糸島の老松神社に卸していた。木鶯は大きさごとに家族で分担が決まっており、大きなものを夫（幸男氏）が、母（静子氏）、私（京子氏）は羽の巻き上げが三段までのものと絵付けを、母（静子氏）がマメ鶯と絵付けをしていた。乾燥した原木を大きさごとに専用の台を使い、切り分けていた。このときに胴部の切り目も入れていた。胴部の切り込みを三枚胸で入れ、羽の巻き上げ前に木の表面を整えるため、鉋を使って成形をしていた。突鑿と作業台を使って、羽の巻き上げを行っていた。夫（幸男氏）は木の具合とかで上手に羽の巻き上げができないと、あと二枚くらいで出来るところで捨ててしまっていた。とてもこだわりを持って作っていた。木鶯はお腹の丸い赤が夫婦円満、家庭円満の縁起物として、新築祝いや結婚祝いで大きな木鶯の注文を受けていた。大きな木鶯は夫（幸男氏）が作っていて、作っ

ている最中に羽がパチンと折れたり、割れている木などは縁起物だから使わないようにしていた。」

岡藤家について　高田保氏と同時期に木鶯を作っていた岡藤勝美氏と岡藤家の木鶯作りについて、岡藤一彦氏（長男）やご家族の方々にお話を伺った。[41]

「父（岡藤勝美氏）は大正四（一九一五）年～平成十一（一九九九）年没、享年八十二歳だった。父（勝美氏）の仕事は鍛冶屋だった。鞴で火を起こして、鉄を焼いて叩いて伸ばしたりして、鍬や鎌の農機具を作っていた。十五～十六歳頃、市川さんに弟子奉公した後に、五条の市川製作所で働いていた。私（一彦氏）は子供の頃、父が勤めていた市川製作所によく遊びに行っていた。その後、農機具を鍛冶屋で作ることが少なくなり、製作所を辞めて、会社務めをしていた。たいがい何をしても上手で、とても器用だった。木鶯作りは専業ではなく、会社勤めが終わってから、合間で作っていた。木鶯だけで生活はできなかった。木鶯のいわれについては「天拝山で菅原道真公が四十九日の行をされた。満願の日に蜂の軍団が来て、行の妨げになった。すると鶯が飛んできて退治してくれ、満願成就を果たしたから」や「嘘を誠に取り替えるから」と親から聞いていた。

父（勝美氏）が木鶯を作り始めたきっかけは分からない。母（岡藤トモエ氏）も作っていた。母は大正六年～平成十七年没、享年八十八歳だった。父は御笠村吉木（現・筑紫野市）の出身で、母は生まれも育ちも太宰府である。叔母（高田静子氏）と母（トモエ氏）は姉妹で、高田幸男氏は母方の従兄弟の間柄になる。叔母（静子氏）は本当に羽を立てるのが早かった。母（トモエ氏）は勤めから帰ってきてから、さっさと鉋かけをして木鶯作りをしていた。もともと木鶯作りは母の実家（石田家）でしていたのではないかと思っていた。御田良清氏は近所に住んでいたが、父が教えてもらったという話は聞いたことがない。御田良清氏は天満宮に勤める前に木鶯を作っていた。

岡藤家の木鶯の特徴　頭部の切り込みは五～七角形で「はちまき」と呼んでいた。胴部の切り込み部分は「あご」と呼んでいた。巻き上げた羽の下に「羽止め」がある。頭部には金紙（初期のころは金箔）を貼り、はちまきと羽を赤と緑で彩色し、胸を丸く赤塗りしている。大きな逆三角の目や笹葉状の脚が特徴である（木鶯の各部名称については図3を参照のこと）。

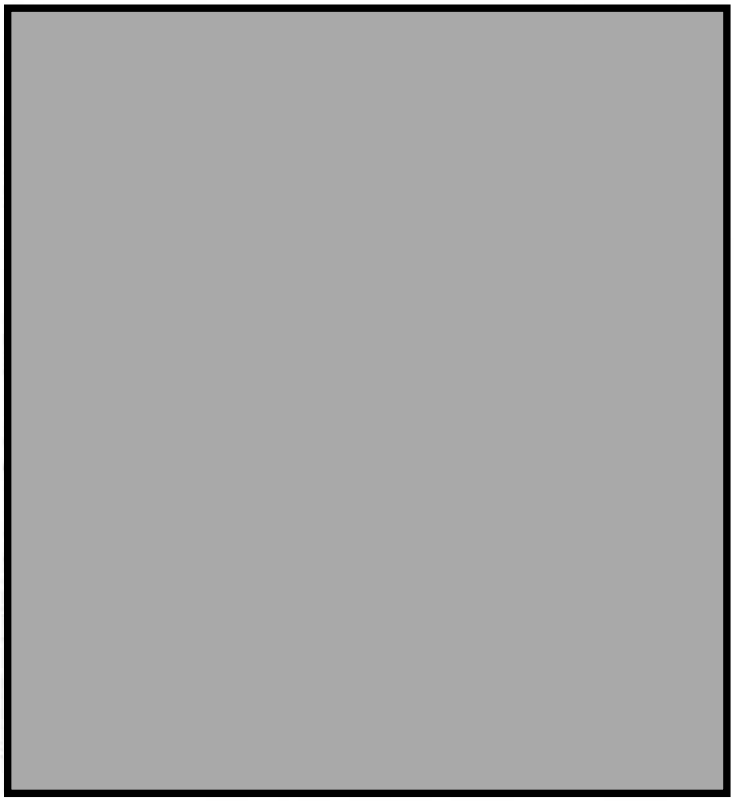

図3　岡藤一彦氏製作の木鶯　　個人蔵

ホウノキについて　原木は山の中に入って、地権者を探して、そこに相談に行って伐っていた。ホウノキというのはどこにでも生えているものではない。群生している所とまったく生えていない所とにはっきり分かれている。当時は大野城市の牛頸小学校周辺によく行っていた。木が群生していたが、今は団地になっている。木の伐り出しは父（岡藤勝美氏）と私（岡藤一彦氏）で切りに行っていた。木を伐って運び出すのがとても大変だった。木は1トントラックいっぱいでいくらで買っていた。その後、妻（澄代氏）と娘（康代氏）も一緒に行くようになった。ホウノキは他に使い道のない木なので、地権者も切って貰って丁度良いという感じだった。木鴬にはホウノキだけではなく、ハゼの木も使っていたらしいが、ハゼは表面だけが、白っぽいけど中が黄色くてざらざらしている。ホウノキは木が柔らかいので、刀の鞘や帽子にも使われている。木は伐ったまま放置しておくと、表面が乾燥して皮が剝けなくなる。木は伐採したら、すぐに皮を剝いて乾燥させた。木を天日で一週間くらい干していた。乾燥しすぎると割れるので、後は日陰に入れて保管していた。

岡藤家の木鴬製作工程　木鴬は父（岡藤勝美氏）、母（トモエ氏）、私（一彦氏）、妻（澄代氏）、娘（康代氏）の家族で作っていた。私（一彦氏）は中学生の頃に作り始めた。始めの頃は鉋かけをして、作り方は見て覚えていった。妻（澄代氏）も嫁いでから、木鴬作りを始め、羽立ても絵付けもしていた。娘（康代氏）も中学生くらいから、絵付けをしていて、羽立てをするようになった。木鴬を売るのは鴬替神事当日の夜だけ、絵馬堂で木鴬を売っていた。絵馬堂では占部勇氏と高田静子氏も売っていた。その他には天満宮に納めていた。その頃、木村當馬氏は木鴬を作っていなかった。昭和五十八（一九八三）年に福岡県知事指定特産工芸品・民芸品に木鴬が選定された。その時に木鴬の民芸品の職人として、岡藤一彦氏と高田幸男氏と木村當馬氏が登録された。福岡県庁に作った木鴬を置いていた。その後、民芸品の雑誌に三人が紹介されたり、ラジオの取材が入ったりした。旧岩田屋で実演し、母（トモヨ氏）が羽立てをして、妻（澄代氏）が絵付けをしたこともあった。それから木鴬の注文が増え、民芸品としての扱いが増えた。その頃から、参道の店からの注文が入り、卸すようになった。梅園にマメ鴬を卸していたが、マメ鴬は小さくて鑿を立てると手が切れていた。絵馬堂で売らなくなったのは、昭和五十八年頃だった。参道の店からの注文が増えたが、仕事の合間で作るようでは、木鴬作りが追いつかなくなった。平成初め頃に参道の店で販売するのをやめたが、平成十四年頃まで趣味で木鴬を作っていた。昔、娘（康代氏）の同級生が瀕死の重症になった時に、私（一彦氏）が木鴬を作ってあげた。その後病気が治り、今でも木鴬を大切にされているという話を聞いた。岡藤家の木鴬作りの道具は市川製作所にあげた。

木鴬は、伐採→皮剥き→天日干し（一週間程度）→日陰干し→寸法切り→鉋かけ→切り込み→羽立て→絵付け→金紙（以前は金箔）貼りの工程を経て作られる。伐採と乾燥後は、木の太さによって寸法ごとに鋸で切り分けた。寸法は二寸～五寸まで。寸法切りの後は、鉋をかけた。鉋は寸法の大小に関わらず、全部かけていた。鉋は大工さんが使う普通の大きさのものを使っていた。鉋をかけたほうが、全体的に綺麗に木地が仕上がる。鉋かけの後は、目とはちまき（目の周辺）、あご（三枚胸と同じ）を切り込んでいた。切り込みの後は、羽を立てる作業。羽立ては家族全員が出来た。羽を立てる前には必ず、突鑿を研いでから作業を始める。鑿を研ぐ時は天草砥石で研いだ後、カミソ

リを研ぐようなつるんつるんした仕上げ砥石を使っていた。羽は自分の腕の感覚が重要。鑿の柄を胸に当てて、体で鑿を押して羽を立てた。鑿の角度を木に対して水平に持っていかないと、上手に羽立てできない。木に深く鑿が入ってダメ。羽が同じ幅で同じ厚みであがらない。鑿も羽の太さによって使い分けていた。木鶯を作るのに機械は使わない。鑿と鋸と鉋の三つの道具だけ。一度、吉井でこけしを作っているところを父（勝美氏）と私（一彦氏）で見に行った。向こうは木地の加工に轆轤を使っている。古い轆轤を譲ってもらってやってみたけども、ダメだった。綺麗に木がまん丸でつるつるになるけども、羽が立てられない。轆轤を回すと横目になるので立てにくい。スピーディにやろうと思って、いろいろ工夫したけれど、やっぱり自分の感覚が大事になる。一刀彫で本当の手作りだから、動力を使って作るものではない。羽立ての後、絵付けは女性がしていた。絵付けの順番は羽の緑を塗って、赤を塗って。羽の緑と赤の配置は適当だった。目とはちまきを塗って、胸の赤を丸く塗って、墨で目と足を書いた。目の縁は女性のアイシャドーと一緒である。絵の具は、ペンキみたいな色材をシンナーに溶いて使っていた。シンナーだったから、頭が痛くなっていた。中毒になりそうだった。絵師の萱嶋秀峰氏から、木鶯の姿は目も羽も末広がりに、胸の赤い丸は家庭円満にという意味があって、幸運の鳥だからそんな姿なのだと話を聞いたことがある。最後に頭に金箔を貼っていた。金箔を貼る時は、木鶯の頭にのりをつけて、木鶯をひっくり返して、金箔に頭を押し付けるようにして付けていた。軽くて剥がれるけど、ピラピラして綺麗だった。金箔のついた木鶯を扱うと禿げるので、金紙になっていった。」

木村當馬氏について　現在、木鶯製作の第一人者で、技術指導も行っている太宰府天満宮元神職の木村當馬氏について、ご本人への聞き取り調査の内容を記録しておく。[42]

「在職中の昭和四十二（一九六七）年に用度係（天満宮の授与品を調達する係）になり、木鶯に関わるようになった。その頃、天満宮周辺で木鶯を作っていた高田保氏と岡藤勝美氏から木鶯を購入し、御社頭で授与していた。高田、岡藤氏は年間それを作るのに忙しかったと思う。太宰府天満宮神職（当時）だった御田良清氏はその頃は木鶯を作っていなかったが、手先が器用なので覚えていた。用度係をしていた時、占部勇氏はもうかなりの歳だった。岡藤氏も高田氏も自分よりも七～八歳上だったので、もうかなりの歳になるという兆しの年齢だった。いつまでもこの人たちをあてにしていたら、肝心の一月七日の神事に差し支えてくるようになると思っていた。そこで、木鶯を教えるだけの技術を自分自身が身につけとかないかんと考えた。

木鶯の製作工程　自分でいろいろ試行錯誤しながら、ずーと作っていった。そしてやっぱり、木を一年くらいの乾燥では、羽をキリキリッと立つには立てやすいが、木が柔らかいから。年数が経つたび、ちょっと湿気にあうとグーっと立てた巻きが戻ってしまう。やっぱりカールを戻さないような、いつまでも巻きの形で止まるには、木を二～三年は乾燥させる必要があった。完全に乾燥させた木でないとダメなんだなということが作りながら分かってきた。刃物はしょっちゅう研いでいる。木鶯は一日にだいたい六～七体のペースで作っている。一〇センチメートルくらいのを立てるのに一体二五分くらいかかる。集中作業で羽立つ時は羽立つだけ。削る時は削るばっかり。出来上がった木鶯には、湿気除けでサランラップをかぶせている。

ホウノキについて　太宰府周辺では、昔はコシアブラのこともホウノ

キと言っていた。本当のホウノキ(朴の木)は木肌に黒の縞模様が入ってあまりよくない。コシアブラは木肌が真っ白い。だから木鶯を作るのはコシアブラで作っている。ホウノキは「方を除くる」と言われて、昔から方角の悪い家の隅にホウノキを植えていた。ホウノキは災難除けの木とされてきた。昔の人は災難を除く木であるホウノキで、木鶯を作った。昔、太宰府はそれこそ野山ばかりだったから、コシアブラはどこにでもあった。それに木が焚き物にならない木だから、伐っても文句を言う人はいなかった。木を伐る時期は十二月末から一月で、木を確保するために植樹をしたりしている。自分が作っている木は信者さんからいただいていたが、信者さんも高齢になり今後は頂戴できなくなるだろう。

技術の伝承について　日本全国には天満宮は約一万二千社あるといわれている。そして鶯替神事の発祥の地が太宰府。それに縁のあるところは鶯替神事をされている。一時期、浮羽郡吉井の天満宮の氏子さんに木鶯を教えて、そのうちの一人が天満宮に木鶯を納めてくれるようになった。しかし、太宰府天満宮で授与する分の木鶯は神職が作るのが本当のことじゃないだろうかと思った。それで天満宮の神職や職員に手ほどきをして、そのうち数人が作れるようになった。

その後、木うそ保存会が結成する時に講習をしてくれと、現在、会長をしている青柳健夫氏に頼まれた。それから、以前は木鶯の胸の切り込み(三枚胸のこと)を、羽を立てる前に切り込んでから作っていた。先に切り込みを入れておくと、何段も羽を立てていると、鑿が胸の切り込みに当たってしまう。それで胸の切り込みを後で入れるようにしたら、羽が前にせり出して、力強く飛び立つような羽になった。この方法は、木うそ保存会の主立った人たちに講習した。講習会では、少なくとも二～三年は乾燥させた木を使いなさいと教えている。それから目は大きく描かないといけない。目が鋭くなると相手の嘘を見破るという、そういう目は書きなさんな、嘘をついてはいけませんよという、優しい諭しの目を描くように心がけておきなさいと教えている。足でも力強く、ギュッと大地にしっかり、枝にしっかり乗っているようなつもりで描きなさいと、思いを込めてとにかく描かないかん。それを特に注意して教えている。木鶯が鶯替神事の祭具でなければ、自分もそう心配したりしない。もう作り手がいなくなったらそれでいいじゃないかと思う。しかし、正月七日の鶯替神事の祭具だから、絶やすわけにはいかない。何とか後継者をと思っていた。天満宮神職も数人作れるようになったし、木うそ保存会の人たちも頑張られているので、安心している。鶯替神事で確保する木鶯がだいたい六百～七百体確保している。自分は年間四百～五百体作っているが、歳だからだんだんできなくなってくる。すると今作ってる人に頑張ってもらうしかない。木うそ保存会も正月七日に絵馬堂で木鶯を販売したらいいのに。それにだいたい鶯替神事には、根本が自分で手作りした木鶯で参加するものだから。天満宮の者で作った木鶯でないといかんというのはない。だから、誰でも気安く入れるように。みんなそうして神事に入って、ずっと四百年の伝統を守って来た。」

以上が鶯替神事や木鶯製作に関わる人々に関する記録である。なお、昭和の木鶯については前述した方々以外にも複数の職人名が確認されたが、今回は記述することができなかった。今後の調査による情報は、いずれ稿を改めたい。

五　江戸時代から現在までの木鶯の形態変化について

これまで紹介した木鶯に関する情報を分析すると、江戸時代から現在まで、どのようにして現在の木鶯の形態に至ったのかについて、知ることができた。江戸時代から現在までの約四百年間を概観すると、木鶯の形態は年代毎の特徴から大きく四つのグループに分類することができる。江戸時代から明治初期、明治時代後半から昭和初期、昭和初期から昭和三十年代前半（ブリュッセル万国博覧会前）、昭和三十年代以降（ブリュッセル万国博覧会後）のグループである（図4～6、表1を参照のこと）。ここではそれぞれの時代ごとの木鶯の特徴と変化の背景について考察し、その系譜を追っていきたい。

江戸時代から明治初期の木鶯　最も古い木鶯の絵図は万治年間（一六五八～六一）と伝えられている。絵図は天保四（一八三三）年に尾崎雅嘉が記した『百人一首一夕話』[43]に掲載されている万治年間伝承の木鶯である（図4―①）。大石真虎が描いた木鶯は、前・横・後と三面展開図で細かく描かれている。全体的に細長く、鶯の造形部分よりも持ち手が長い特徴がある。頭・くちばし・胴部は切り込みにより成形され、頭と逆三角の小さな目の周辺が黒く、胸や羽、足が赤（丹）と黒の二色で彩色される。尾羽部分が削りで表現される。

他に木鶯の形態を知ることができる絵図に、文化二（一八〇五）年推定の絵俳書『わすれくさ』[44]（図4―②）、嘉永六（一八五三）年の『筑前太宰府鶯換追儺之図』[45]（図4―④）がある。ともに斎藤秋圃が鶯替神事の様子を描いたものである。その中で描かれている木鶯は、全体的に細長く、持ち手が長い特徴がある。頭・くちばし・胴部は切り込みで成形され、小さな丸目が確認できる。彩色は顔が黒く、胸が赤塗りされ、翼が黒線で表現されている。足の表現はない。二つの絵図に描かれた木鶯はその特徴が共通している。ただ、嘉永六年の『筑前太宰府鶯換追儺之図』の木鶯は尾羽部分が巻き上がっている様子が見られる。同じ絵師が描いた木鶯の描写が年代によって異なることは木鶯の形態が変化していたことを示していると思われる。このような描写は明治九（一八七六）年～十五年収蔵の『筑前歳時図記』[46]でも確認でき、嘉永年間前後、つまり幕末頃に尾羽の巻き上げのある木鶯が作られていたと考えられる。ここまで江戸時代に描かれた木鶯には、全体的に細長く、持ち手が長い特徴や頭・くちばし・胴部の切り込み、小さな丸目と赤黒の彩色といった共通の形態を持っている。このような形態の系譜は、明治十七年に描かれた吉嗣拝山の『太宰府廿四詠』[47]（図4―⑤）や昭和八（一九三三）年の川崎巨泉写生『玩具帖』[48]（図5―⑥）の木鶯に繋がっている（図3・4を参照のこと）。

共通する形態の木鶯が約二百年間も作り続けられた背景には二つの理由が考えられる。まず、『百人一首一夕話』の中で鶯替神事の様子を描いた絵図の注釈には、「…参詣の老若男女、木にて作りたる鶯の鳥を調へ、互いに袖にかくし、うそかえんと詢りて合て、双方より取り替るなり。…」と記され、同様の記述は天保十一（一八四〇）年に山崎美成の『三養雑記』にも見られる。着物の袖に隠して交換し合う様子は斎藤秋圃の『わすれくさ』や『筑前太宰府鶯換追儺之図』にも描かれている。このことから江戸時代から明治初期の木鶯の形態が、細長く持ち手が長い理由には、着物の袖に鶯を隠す機能性ゆえに定着していたと考えられる。さらに先に述べた機能性の理由だけでなく、ケズリカケ（鑿で木肌をカールさせて削る技法の製品）が原型とされる木鶯は祭具としての依代の役割を担っていたからとも考えられる。

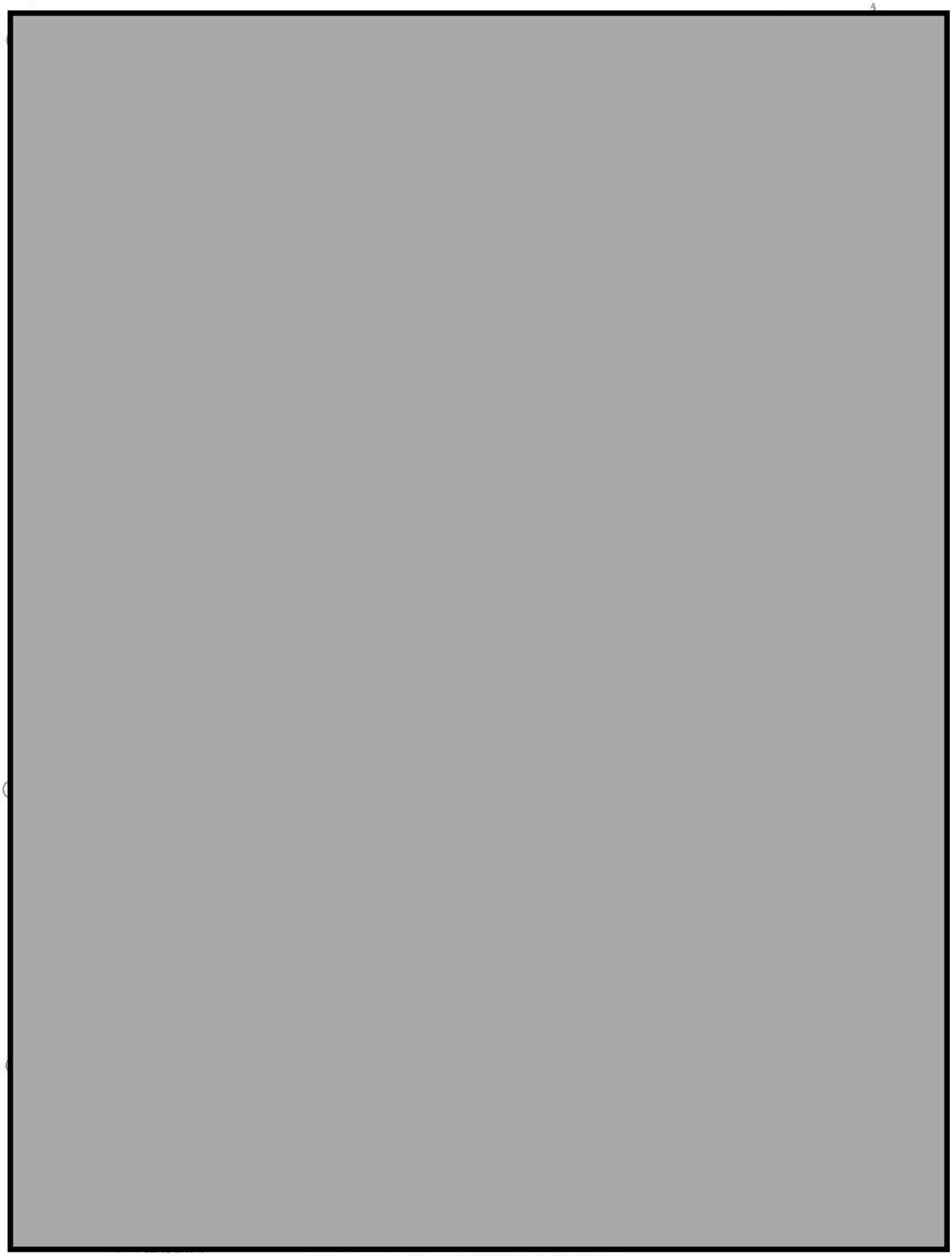

図４　江戸時代から明治期の木鬻変遷図

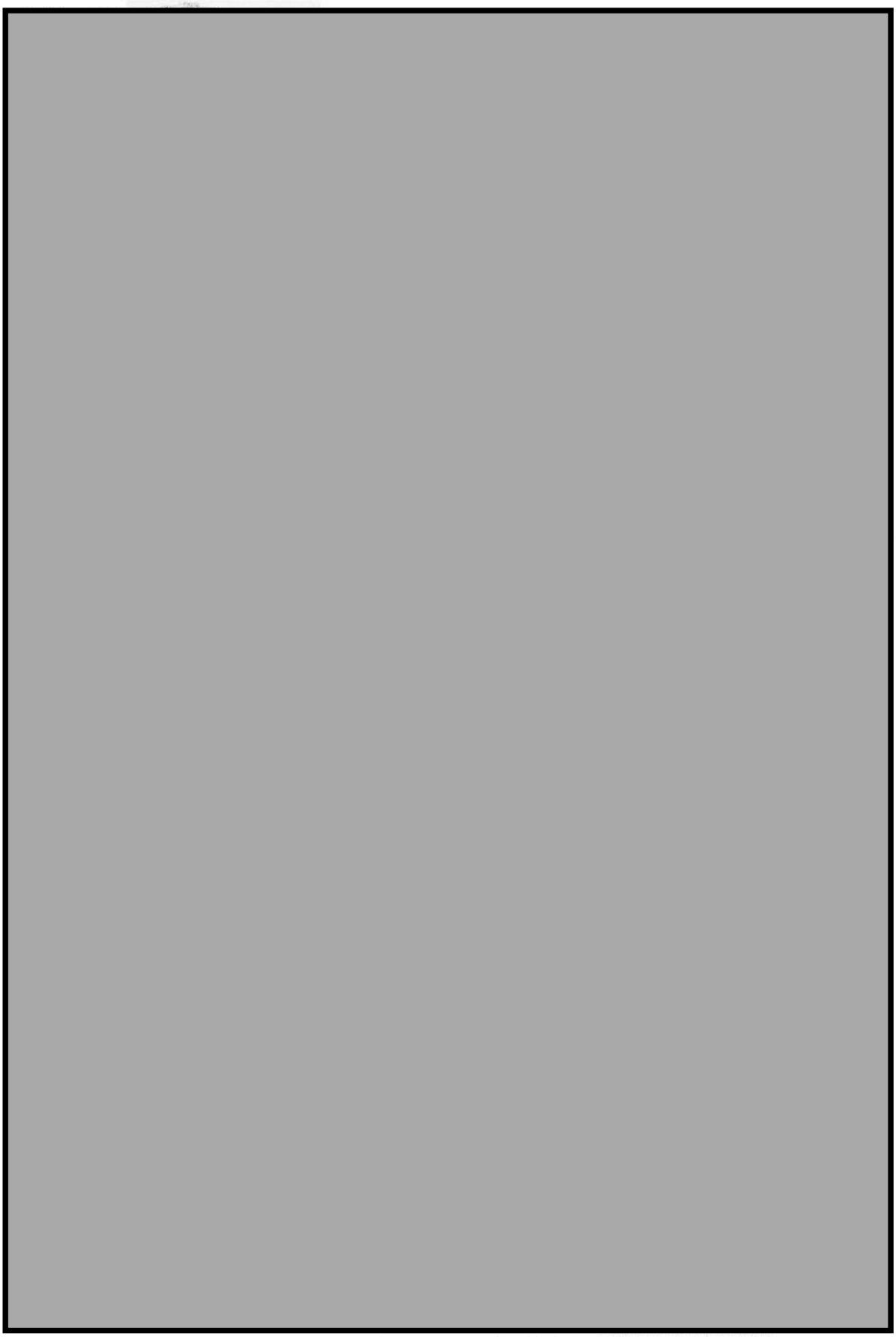

図５　明治後半から昭和初期の木鶯変遷図

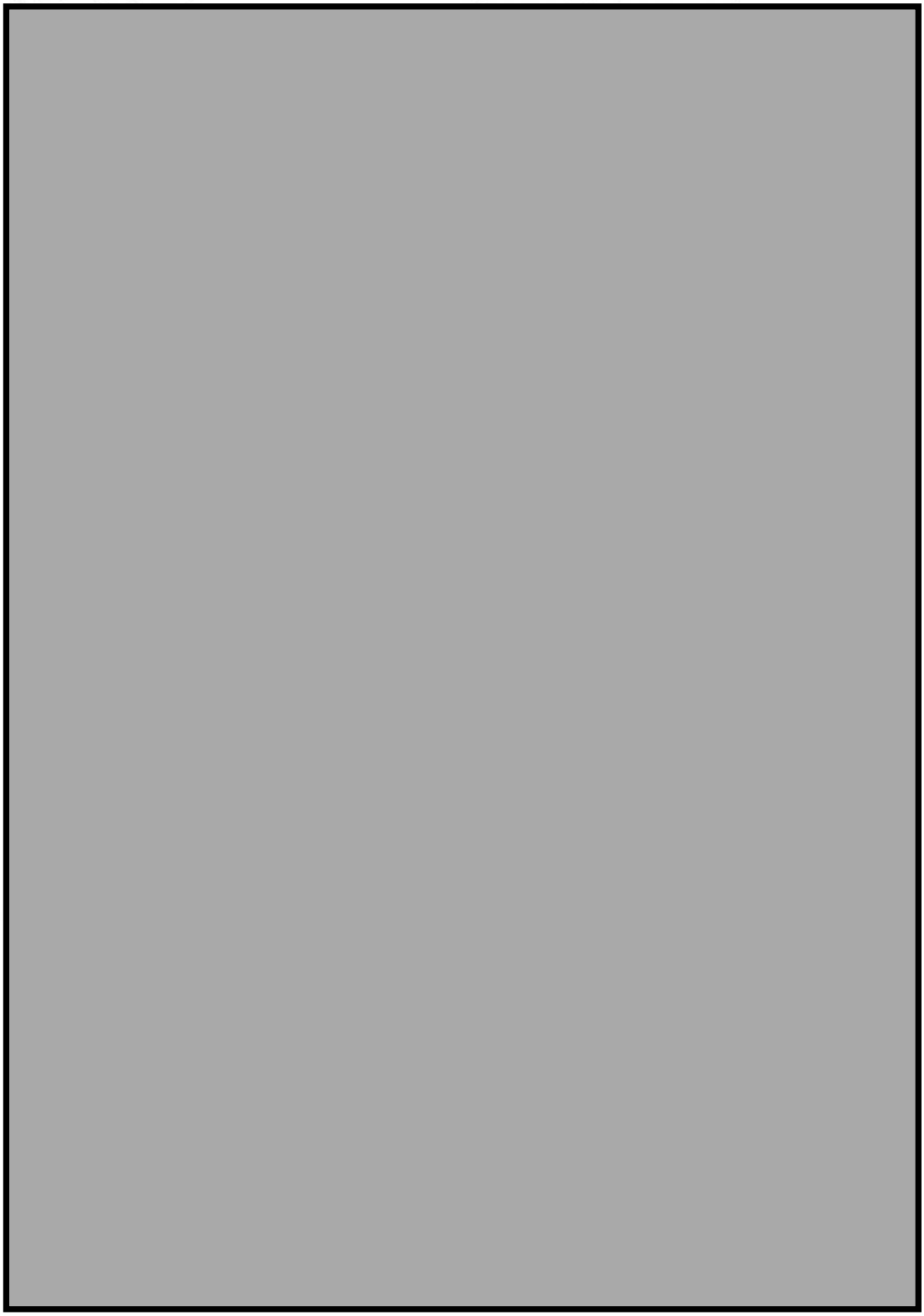

図６　昭和初期から昭和50年の木鶯変遷図　　九州国立博物館蔵、同写真提供

細長い木鶯の形態は、神事の際に用いられる御幣や古代～中世の祭祀に使用された木製品に類似した特徴を持っている。太宰府条坊跡で出土した木製品[49]に、細長い棒に顔部分のみを切り込んだものがある。自分の身代わりとして使用される依代は病や想いを移す装置として使われ、破壊や廃棄、送付する行為によって、諸願成就する効力を発揮すると考えられていた。人々が一年の間についた嘘を木鶯に移し、鶯替神事によって、誠に変じた木鶯を持ち帰る行為には、依代の概念が受け継がれていると考えられる。

明治時代後半から大正、昭和初期の木鶯　この時期の木鶯は形態が劇的に変化する。江戸時代から明治初期のものに共通する細長い形態や赤黒のシンプルな彩色は見られない。共通点としては、小さな丸目、目と胸が赤で彩色、羽が線で描かれる、不揃いな尾羽の巻き上げがあげられる。現在の木鶯につながる特徴に尾羽の巻き上げがある。ここで尾羽と書いているのは、羽が巻き上げではなく線によって描かれているからである。羽部分を線で表現するのは江戸時代から昭和初期の木鶯に一貫してみられる特徴である。このことから巻き上げは尾羽の表現と考えられる。木鶯の彩色や寸法は様々なものが出現する。寸法は二寸（六センチメートル）～六寸（一八センチセンチメートル）まであり、神事で交換するにはそぐわない大きさのものが存在する。また、葉書（図5―④）や張子鶯（図5―⑤⑦⑧）が作られていたことが分かった（図5を参照のこと）。特に、木鶯の印象を華やかにしているのは、頭部に貼られた金箔である。神事に使用されていたシンプルな形態の木鶯は、この時期に色彩や形態で魅せる木鶯へと変化している。このような変化は、鶯替神事に使用する祭具・お守りとしての性格とは別に、色彩豊かな郷土玩具としての木鶯が作られたと考えられる。江戸時代よりも明治時代以降、日清・日露戦争を経て、新たな時代の気運が影響し、さらに独創的な木鶯のデザインを創造・模索した時期といえるだろう。それだけ、当時の太宰府が新たなデザインを創造する文化的に成熟した下地を持つ地域であったと考えられる。さらに木鶯のデザインの豊富さの背景には、作り手が多く存在した可能性もある。

昭和初期から昭和三十年代前半の木鶯　昭和初期から昭和三十年代前半までの木鶯の特徴について見ていきたい。この時期の資料は福岡在住の郷土玩具蒐集家秋吉元氏の収集品が中心となるが、さらに聞き取り調査によって様々な情報を得ることができた。昭和の木鶯の特徴は、彩色による羽の表現がなくなったことである。本来、木に止まる鶯の鳥に似せて作られた木鶯は、時代を経ることに、尾羽の表現が誇張されてきた。幕末頃、羽は黒線で表現され、尾羽の削りに巻きが見られるようになる。明治時代以降、羽は線と彩色で表現され、鶯の下の位置に尾羽の巻き上げが作られる。昭和に入ると羽の表現は欠落し、巻き上げの位置が目の近くまで上がっている。昭和から現在の木鶯に見られる巻き上げの部分は、羽と尾羽の明確な表現区別のない「羽」を表現しているものである。現在の木鶯職人は、「以前は飛びきらんような羽だったが、力強く飛ぶような羽になった」と言われる。長い間、木に止まっていた木鶯は、昭和になって大きく羽ばたく姿へと変貌を遂げたのである。現在のような木鶯の形態に変化した発端は昭和三十三（一九五八）年のブリュッセル万国博覧会である。この万国博覧会以前の木鶯は、昭和三十年代以前の木鶯の製作工程を守っていた職人、占部勇氏の作品がある。占部勇氏とその家族が製作していた木鶯の木鶯の特徴は、小さな丸目と、三つ叉の鍬先に似る脚の形である（図1・図6―①～③を参照のこと）。占部家では木鶯を、藁切りやナ

タ、鎌などの身近にある農機具を改良して作っていたことが分かった。鷺替神事に参加する人々がそれぞれで木鷺を手作りする際には、専用の道具ではなく、農機具を使用して作っていた名残なのかもしれない。しかし、参加する個々の人々が片手間で作っていた木鷺と、占部家のように専業で製作する木鷺ではその製作工程や技術に差がある。改良した農機具で木鷺を単一的に大量に仕上げる技術は、熟練した職人技であったと思われる。占部勇氏の実家は飴屋の副業で木鷺を作っており、このような道具を使った木鷺作りは占部家に伝承されていたと思われる。占部家が製作した木鷺は、丸目や持ち手が長い特徴から、江戸時代からの系譜を継いでいたと考えられる。江戸時代からの系譜を引く占部家の木鷺はその形態的特徴も製作技術も昭和五十年頃の廃業とともに失われている。

昭和三十年代以降の木鷺　現在の木鷺の形態が出来上がる発端となったのは昭和三十三（一九五八）年のブリュッセル万国博覧会である。昭和に入り、「尾羽」と「羽」の混用による新しい「羽」が作られるようになり、その後、この万博を期に、工業デザイン的な木鷺が作られる。工業デザイン的な木鷺とは、江戸時代に見られるような鷺鳥の写実的な表現から離れた形態でありながら、「太宰府の木鷺」と一目で認識できる新しいデザインを作り上げたことである。新しいデザインの木鷺を考案したのは太宰府天満宮神職御田良清氏である。御田氏より木鷺製作を教わった高田保氏により、ブリュッセル万国博覧会に出品した「きうそ」が製作された。出品は「きうそ」単独ではなく、「郷土玩具、紙製品その他」のグループの一つとして、銅賞を受賞している。受賞者には日本貿易振興会理事長名で贈られた賞状があるが、「きうそ」に授与された賞状は現在、行方不明となっている。余談だが、この万博で受賞し、現在人間国宝に選定されている作家は多い。戦後日本の威信をかけたブリュッセル万国博覧会の成果は、現在の伝統美術工芸品の礎を築いた一つの出来事と言える。高田家の木鷺の特徴は、目の切り込み一杯に描かれた大きな逆三角目と、笹葉に似る脚の形である。これらの木鷺は、現在の鷺替神事や参道で見受けられるものと同じ意匠を持ち、木鷺の形態がほぼ出来上がっている（図2・5―④～⑥を参照のこと）。高田家や岡藤家では占部家のように改良農耕具を使用した木鷺製作ではなく、突鑿で木鷺の羽の巻き上げを行っている。さらに、羽の巻き上げ前の木地仕上げに鉋を使用している。高田保、幸男氏が制作した木鷺には、羽の巻き上げが見事に揃ったものが遺されている。これらの遺作からは、ブリュッセル万国博覧会で受賞した木鷺製作技術の高さを窺うことができる。

昭和五十年に占部家が廃業した後は、ブリュッセル万国博覧会受賞の「高田スタイル」の木鷺をもとに、太宰府天満宮神職や宰府周辺の他の職人により、新たな製作技法などが加えられ、現在の木鷺の形が出来上がった。その後、昭和五十八（一九八三）年に福岡県知事指定特産工芸品・民芸品に木鷺が選定され、木村當馬氏、岡藤一彦氏、高田幸男氏が木鷺の職人として登録された。さらに、昭和六十三（一九八八）年には、「木鷺」が太宰府天満宮により商標登録されたことで、現在の「木鷺」の形が定着したのである。

現在の木鷺　木鷺は、太宰府天満宮神職と木うそ保存会の方々等により、製作されている。太宰府木うそ保存会は平成十（一九九八）年十二月十七日に発足し、木鷺の製作技術伝承と原木の育成と確保を目的に活動している。現在会員三〇名を数えるが、羽上げから絵付けまで出来る人は六～七名という。現在は年に一度、「木うそ制作体験教室」

表１　太宰府の木鴈観察表

西暦	和暦	鴈の特徴														備考	図番号
		頭	顔	目	くちばし	胸（彩色）	胸（切り込み）	羽（彩色）	羽（加工）	尾羽（彩色）	尾羽（加工）	足	寸法	素材	制作者名		
(1658～61)	(万治年間)	黒	黒	逆三角目(小)	○(切り込み)	赤の刷毛塗り	多角形	赤・黒の線と点描	×		削り	○		木（樫）			図４－①
1805	文化２	黒	黒	丸目	○(切り込み)	赤塗り	一枚胸	黒線	×	(黒塗り)	削り	×		木			図４－②
1852	嘉永５			丸目	○(切り込み)				やや巻き		○	○		ブロンズ製品			図４－③
1853	嘉永６	黒	黒	丸目	○(切り込み)	赤塗り	一枚胸	黒線	×	(黒塗り)	やや巻き	×		木			図４－④
1876～82	明治９～15	黒	黒			赤塗り	○				やや巻き			木		作者不明『筑前歳時図記』国立公文書館蔵	
1884	明治17	黒	黒	逆三角目(小)	○(切り込み)	赤塗り	○	黒線			やや巻き	○		木			図４－⑤
1897	明治30	金箔	赤・緑	逆三角目(小)	×	赤塗り（楕円）	三枚胸	黒・赤・緑の線		赤・緑の点描	巻き	○	〔高さ〕二寸（6.0cm）〔直径〕一寸二分（3.6cm）	木			図５－①
1925	大正14	金箔	赤・青	逆三角目(小)	×	赤塗り（丸）	やや三枚胸	×	×	赤・青の点描	巻き	○	〔高さ〕三寸（9.09cm）	木			図５－②
		黒地に金箔	赤	逆三角目(小)	×	赤塗り（丸）	三枚胸	黒線	×	赤の点描	巻き	○	〔高さ〕三寸（9.09cm）	木			
		金箔	青・赤	丸目	×	×	一枚胸	黒線	×	赤・青の点描	巻き	○	〔高さ〕六寸（18.18cm）	木			
1925	大正14					(赤塗り)	○				巻き			木		モノクロ写真	図５－③
1931	昭和６	金箔	赤・青	丸目	○（黒線）	赤塗り	三枚胸		巻き			○		木（うそ絵郵便葉書）			図５－④
1919～32	大正８～昭和７										やや巻き	×		紙（張子）			図５－⑤
1933	昭和８	黒地に金箔	赤・黒	丸目	×	赤塗り（丸）	凸三枚胸	黒・若竹	削り	黒塗り	削り	○	〔高さ〕二寸三分（6.9cm）	木			図５－⑥
		黒地に金丸	赤・黒	丸目	×	赤塗り（丸）	三枚胸	黒・若竹	×	黒塗り	削り	○	〔高さ〕二寸（6.0cm）	木			
1934	昭和９			逆三角目(小)	○（黒線）	(赤塗り（丸))	○	(黒線)	×	(点描)	巻き	○		木		モノクロ写真	図５－⑦
						(赤塗り)						○		紙（張子）		モノクロ写真	
1934	昭和９	黒（金箔）	赤	丸目	×	赤塗り（丸）	三枚胸	×	巻き		巻き	○	〔高さ〕6.3cm	木（コシアブラ）	占部		図６－①
1936	昭和11	金紙に青金・赤金を塗る		丸目	×	赤塗り	一枚胸	×	×	竹（青竹）・赤・炭の点描	×	○	〔高さ〕一寸四分（4.2cm）	紙（張子）			図５－⑧
1945	昭和20	黒	赤	逆三角目(小)	○（黒線）	赤塗り（丸）	三枚胸	×	巻き	赤の点描	巻き	○		木（コシアブラ）	占部		図６－②
1959	昭和34	膠の痕跡	赤・青竹	丸目	○（黒線）	赤塗り（丸）	三枚胸	×	巻き	赤・青竹の点描	巻き	○	〔高さ〕9.5cm	木（コシアブラ）	占部		図６－③
1955～65	昭和30年代	膠の痕跡	赤	逆三角目(大)	○（黒線）	赤塗り（丸）	三枚胸	×	巻き	赤の点描	巻き	○	〔高さ〕12.5cm	木（コシアブラ）	高田		図６－④
1969	昭和44	金紙	赤・若竹	逆三角目(大)	×	赤塗り（丸）	三枚胸	×	巻き	赤・若竹の点描	巻き	○	〔高さ〕7.5cm	木（コシアブラ）	高田	背面に「太宰府天満宮」焼印	図６－⑤
1973	昭和48					(赤塗り)	三枚胸		巻き		巻き	○		木（コシアブラ）	占部	堤忠二郎『福岡の郷土玩具』福岡民報社　モノクロ写真	
1975	昭和50	(金紙)	赤・若竹	逆三角目(大)	○（黒線）	赤塗り（丸）	三枚胸	×	巻き	赤・若竹の点描	巻き	○	〔高さ〕9.6cm	木（コシアブラ）	岡藤	正面に「太宰府」ゴム印	図６－⑥

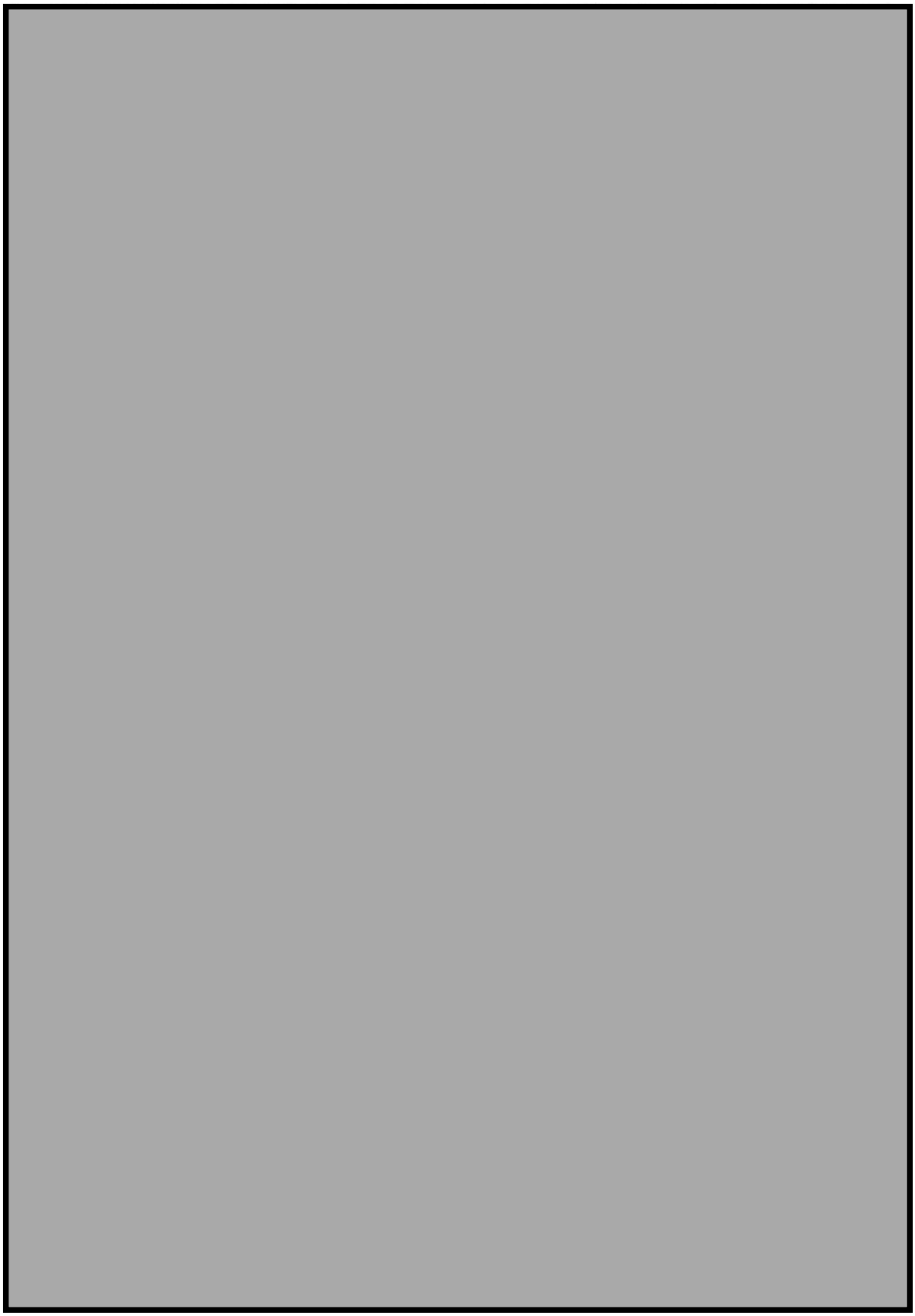

図７　木鬻製作工程　　太宰府木うそ保存会写真提供

で伝統技術の伝承と新規会員の育成を行い、太宰府館や門前祭りなどで木うその絵付け体験を行う啓発普及活動をしている。木うその製作に使用する突鑿などの道具は、河津商店で手に入れることができる。突鑿の柄の長さは、木村當馬氏が指定した長さのものを基準にしている。特注の突鑿をあつかう商店は木うそ技術を伝える上でも欠かせない存在である。原木のコシアブラを育成するために、太宰府市環境美化センターでの植樹活動や木うその森の管理や伐採を行っている。「木うその森」[50]は林野庁管轄の国有林である。この制度は木を使った伝統工芸品や文化財修復のために必要な森を確保する目的で作られたものである。「木うその森」は、全国二〇箇所が現在指定されているうちの一つである。原木の確保は、現在九重町の「木うその森」と太宰府市と友好都市だった旧耶馬溪町（現・中津市）などで伐採を行っている。原木の伐採作業は木が水をあまり含んでいない十月から二月の間に行われる。伐採後は皮を剥き、日陰干しで乾燥させる。その後の木鶯製作工程は図7を参考していただきたい。会員のほとんどが、定年退職後に始められる人が多く、原木の伐採作業などの重労働が年々厳しくなっている。近年はコシアブラの新芽が山菜として注目され、その乱獲により、原木育成に影響を及ぼすようになっている。

六　まとめ

現在、私たちが目にする木鶯は、四百年以上の歴史と伝統のある太宰府の遺産である。ここまで時代毎に木鶯の特徴や製作工程を見てきたが、様々な背景や出来事を含み、絶えず木鶯の形態は変化し続けてきた。現在の大きな逆三角目と飛び上がるような羽の巻き上げを持つ木鶯は、他地域には見られない太宰府独自のものである。その羽の巻き上げも直接のきっかけは五十年前のブリュッセル万国博覧会であっても、その起源は幕末まで遡ることができる。現在の木鶯の形態も、これから次の時代や世代に伝承されていく一つの通過点であってほしいと願っている。

註

(1) 城野茂門「信仰の中の鳥②」『とびうめ』第五八号　一八頁　一九八四年
太宰府天満宮、安部幸六「太宰府天満宮の鶯替」『野鳥』八巻二号　九三～九八頁　一九五〇年、中西悟堂『定本野鳥記』四　一九六四年　春秋社

(2) 城野茂門「信仰の中の鳥①」『とびうめ』第五七号　一四頁　一九八四年
太宰府天満宮

(3) 大久保千濤『太宰府の光』八頁　一九二六年　大野白水堂

(4) 西高辻信貞『学問の神様―太宰府天満宮と天神信仰―』一四三頁　一九七七年　徳間書店、味酒安則「うそ（嘘）とウソ（鶯）のお話し」『とびうめ』第七〇号　六～七頁　一九八七年　太宰府天満宮

(5) 貝原益軒『太宰府天満宮故実』一六八五年と同じ記述は『筑前国続風土記』巻之八　一七〇三年にもみられる。

(6) 前掲註（4）参照。

(7) 尾崎雅嘉『百人一首一夕話（上）』二一六頁　一九七三年　岩波書店、万治年間の木鶯の絵図は、同時期の文献に記載されているわけではなく、あくまで伝承として捉えておく必要がある。図4―①参照。

(8) 山崎美成『三養雑記』一八四〇年

(9) 斎藤秋圃挿絵『わすれくさ』一八〇五年推定　福岡大学図書館蔵、図4―②参照。

(10) 斎藤秋圃『筑前太宰府鶯換追儺之図』一八五三年　福岡市博物館蔵、図4―④参照。

(11) 作者不詳『筑前歳時図記』一八七六～一八八二年収蔵　国立公文書館蔵

(12) 仙崖『うそ替画賛』出光美術館蔵
(13) 浜松歌国『摂陽奇観』巻四十五　一八一二年
(14) 川崎巨泉『巨泉玩具帖』六巻七号三　一九一九～一九三二年写生（一八九七年収集品）大阪府立中之島図書館蔵、図5―①参照。
(15) 川崎巨泉『巨泉玩具帖』四巻五号二七　一九一九～一九三二年写生（一九二五年収集品）大阪府立中之島図書館蔵、図5―②参照。
(16) 川崎巨泉『玩具帖』二号二四　一九三一～一九四二年写生（一九三一年収集品）大阪府立中之島図書館蔵、図5―④参照。
(17) 川崎巨泉『玩具帖』一七号三一　一九三一～一九四二年写生（一九三三年収集品）大阪府立中之島図書館蔵、図5―⑥参照。
(18) 川崎巨泉『玩具帖』三〇号九　一九三一～一九四二年写生（一九三六年収集品）大阪府立中之島図書館蔵、図5―⑧参照。
(19) 吉嗣拝山『太宰府廿四詠』一八八四年
(20) 前掲註（3）参照。
(21) ブリュッセル万国博覧会に出品した「郷土玩具、紙製品その他」のグループの内訳については、畑野栄三『きじうま聞書』一五一～一五四頁　一九九〇年　三一書房から引用している。
(22) 武井武雄『日本郷土玩具』六六一頁　一九三四年　金星堂、図5―⑦参照。
(23) 堤忠二郎『福岡の郷土玩具』一六頁　一九七三年　福岡民報社
(24) 前掲註（4）参照。
(25) 川崎巨泉『巨泉玩具帖』一巻八号一二　一九一九～一九三二年写生（収集年代不明）大阪府立中之島図書館蔵、図5―⑤参照。
(26) 前掲註（18）参照。
(27) 図5―③参照。
(28) 九州国立博物館蔵、図6―①参照。
(29) 九州国立博物館蔵、図6―②参照。
(30) 九州国立博物館蔵、図6―③参照。
(31) 九州国立博物館蔵、図6―④参照。
(32) 九州国立博物館蔵、図6―⑤参照。
(33) 九州国立博物館蔵、図6―⑥参照。
(34) （聞き取り対象者）占部史子　（聞き取り調査日付）二〇〇九年七月二十八日　（聞き取り場所）占部史子宅　（調査者）太宰府市文化財課柳智子・山村信榮　（テープ書き起こし者）柳
(35) 木鶯の胸の切り込み部分の呼称。同一部位ながら、製作する家で呼称が異なる。占部家では「三枚胸」と言い、岡藤家では「あご」と呼ばれる。
(36) 巻き上がった羽の下に作られる巻き上げの呼称。巻いた羽が重みや湿気で落ちないように止めておく役割を持つ。同一部位でも製作する家により呼称が異なる。占部家では「トメ」と言い、岡藤家や木村當馬氏、木うそ保存会などでは「羽止め」と呼ばれる。
(37) 木鶯の材料として使われるホウノキは、太宰府周辺では元々鬼門の方向から入ってくる災いを除く木と考えられている。このような木を使って作る木鶯は悪霊退散や火除禁厭のお守りとされる。さらに災いを除き幸運をもたらすとして木鶯を新築祝いや結婚祝いで贈答する習慣がある。学名のホウノキ（朴の木）はモクレン科、コシアブラはウコギ科で種類の異なる木である。しかし太宰府では古くからコシアブラのことをホウノキと呼び、区別がなかった。実際に木鶯に使用する木の大半はコシアブラである。コシアブラは木肌が白いが、ホウノキ（朴の木）は年輪の一部分が黒くなるものがある。木鶯の羽や胸が黒くなるのは見た目や彩色を施す上で使用できないため、ホウノキ（朴の木）はあまり使われない。本文中でホウノキと表記しているものはコシアブラのことである。
(38) 羽を巻き上げる動作を表す呼称。同一の製作工程は製作者により呼称が異なる。「羽上げ」は占部家などで呼ばれ、太宰府天満宮神職や岡藤家では「羽立て」と呼ばれる。
(39) （聞き取り対象者）御田慶子・御田満生　（聞き取り調査日付）二〇〇九年五月二十六日　（聞き取り場所）御田満生宅　（調査者）柳・山村　（テープ書き起こし者）柳
(40) （聞き取り対象者）高田京子　（聞き取り調査日付）二〇〇九年七月十一日　（聞き取り場所）高田京子宅　（調査者）柳・山村　（テープ書き起こし者）柳
(41) （聞き取り対象者）岡藤一彦・岡藤澄代・八尋康代　（聞き取り調査日付）二〇〇九年十二月三日　（聞き取り場所）岡藤一彦宅　（調査者）柳　（テープ書

き起こし者）柳

(42) （聞き取り対象者）木村當馬　（聞き取り調査日付）二〇〇九年四月十三日（聞き取り場所）太宰府市文化ふれあい館　（調査者）太宰府市文化財課高橋学・市史資料室藤田理子　（テープ書き起こし者）藤田

(43) 前掲註（7）参照。

(44) 前掲註（9）参照。

(45) 前掲註（10）参照。

(46) 前掲註（11）参照。

(47) 前掲註（19）参照。

(48) 前掲註（17）参照。

(49) 『太宰府条坊跡XVI―「市の上」周辺の調査―』二〇〇〇年　太宰府市教育委員会

(50) 「木の文化を支える森林づくり」は、国有林野を一定期間活用する林野庁の事業である。歴史的木造建造物や伝統工芸品などの「木の文化」を継承していくためにその素材を供給する森林を守り育てることを目的としている。「木うその森」は平成十六年三月十六日に太宰府木うそ保存会（相手方）、太宰府市長・太宰府市商工会長（活動実施者）と九州局との間で協定が締結された。大分県九重町の国有林野一・六五ヘクタールが「木うその森」として活用されている。伝統工芸品の継承を目的とした森林は「秋田杉桶樽」（国指定伝統工芸品）、「大館曲げわっぱ」（国指定伝統工芸品）、「秋田杉製材品」（地域伝統産業）、「木うその森」（郷土玩具）、「南木曽ろくろ細工」（国指定伝統工芸品）、「蘭桧傘」・「木曽材木工芸品」（県指定伝統工芸品）の六カ所が設定されている。

〔付記〕本稿は、木鶯に関する情報をなるべく多く記録することを目的としたため、拙い文章のまま書き綴っていることをお詫び申し上げます。また、本稿を書くにあたり、太宰府天満宮元神職の木村當馬氏には、ご多忙の中、天満宮での木鶯作りの苦労や工程などをお聞かせいただき、誠にありがとうございました。太宰府木うそ保存会の青柳健夫氏、大倉茂人氏、吉田幸一氏には、木鶯に関わるきっかけを賜り、さらに木鶯作りが上達しない筆者を叱らずにご教示くださり、いつも心より感謝しております。さらに突然の調査依頼にもかかわらず、故人の遺作や貴重な記録を拝見、拝聴させて頂いた占部史子氏、占部季子氏、岡藤一彦氏、岡藤澄代氏、八尋康代氏、高田京子氏には心よりお礼申し上げます。下調べから調査、論文にまとめる機会を与えていただいた山村信榮氏には心より感謝申し上げます。この他、多くの方々のご援助やご教示、ご協力を賜り、以下に記し感謝の意を表します。

秋吉元、井上信正、大阪府立中之島図書館、大庭義徳、河津商店、太宰府木うそ保存会、九州国立博物館、清原倫子、古香庵、小西信二、太宰府市教育委員会、高橋学、梅園、福岡市博物館、福岡大学図書館、藤田英雄、御田慶子、御田満生、八尋千世（五十音順敬称略）

（やなぎ・ともこ　太宰府市教育委員会文化財課嘱託）